

機関番号：32687
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19520402
 研究課題名（和文）『哲学字彙』にみられる近代学術用語の現代日本語への定着過程の検証

研究課題名（英文）The establishment of scholarly terms of Tetsugaku Jii in modern Japanese.

研究代表者

真田 治子 (SANADA HARUKO)

立正大学・経済学部・教授

研究者番号：90406611

研究成果の概要（和文）：

本研究は語彙の明治から現代に至る消長の過程を、明治期学術用語集『哲学字彙』収録の用語を使って、資料研究と計量語彙論の両面から明らかにした。主な成果は①『英独仏和哲学字彙』の稿本と編者の自筆書き入れ本を発見したこと、②明治17年刊『改定増補哲学字彙』に実は明治24年版もあるとわかったこと、③「遅→速→速→遅」といわれる語の伝播の様相を分析するため、医学等で使われる多変量ロジスティック回帰分析を言語学に応用する手法を研究分担者（横山）とともに開発したことである。③は国立国語研究所の岡崎調査の分析に使われた。

研究成果の概要（英文）：

This study was undertaken with the aim of achieving a quantitative and lexicographical overview of the historical changes in vocabulary in Japanese. The results are: (1) A manuscript of the third edition of Dictionary of Philosophy has been found. A copy of the dictionary with editor's marginal notes has been also found. (2) Another edition of Dictionary of Philosophy published in 1891 has been found. (3) Multiple logistic regression has been developed for linguistics to explain language change with an S shape curve, the so called "slow-quick-quick-slow" model. This method is employed for the analysis of regional language data by the National Institute for Japanese Language.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：国語学、計量言語学、語彙論、哲学字彙、近代語研究

1. 研究開始当初の背景

研究代表者（真田）は、幕末・明治初期に西欧との文化接触や文明開化の影響によって新たに生まれた語の、その後の現代までの消長を研究している。明治維新前後には「客観」「法律」など数多くの新しい概念を表わ

す語が生じ、その結果、日本語の語彙はその基本的な部分にまで大きな変動がもたらされた。これらの語は西欧の文物受容における日本の近代化を支えただけでなく、この150年の間に現代日本語の基本的な語彙の一部に浸透し、専門分野のみならず一般的な言語

生活においても必要不可欠な語彙となっている。

研究代表者(真田)は、この新しい概念を表わす語、特に専門用語の中でも学術関係の用語が明治初期に導入されてから現在に至るまでの過程でどのようにして定着、一般化していったか、また或いは定着できずに消失していったか、という語彙の消長に着目し、その全体像を主に計量語彙論の理論と手法によって明らかにすることを研究の目的としている。幕末・明治初期から現代にかけて、「学術用語」が一般社会に広まっていく様相を雑誌・新聞・小説・外国語辞書などでの語の使用を通してみていくことで、近・現代の日本語基本語彙の形成過程を明らかにするという研究である。

研究代表者(真田)が2002年に公刊した博士論文『近代日本語における学術用語の成立と定着』(絢文社)では、明治14(1881)年に出版された人文・社会・科学分野の総合学術用語集『哲学字彙』初版に含まれる「法律」「物理学」などの漢語を、多くの訳語を生み出した西周の語彙との比較や、幕末から現代にかけての各種の辞書との比較することで、その性格を分析した。『哲学字彙』は、東京大学哲学科第1期生の井上哲次郎らが編纂したもので、初版がすぐに売り切れになった逸話が残っているほど当時の学界への影響力は大きかった。西周の新語の多くもこの『哲学字彙』に受け継がれ一般化したと考えられており、現代日本語の形成に至る道筋の重要な資料と考えられる。

2. 研究の目的

従来、明治時代の語、特に幕末から明治にかけて、西欧の文物を新しく漢語の形で導入した、翻訳語としての和製漢語や新漢語・漢訳語の研究では、語誌の研究が多かった。このような個別の語の研究も非常に重要であるが、一方でより広い視点からその時代の言語全体の動向をみることも必要であり、それには単に事例をあげるだけでなく語彙の計量的分析も重要である。そこで本研究では資料研究と計量語彙論の両面から、語彙の伝播と定着の問題を検討した。

(1) 『哲学字彙』の資料的研究

『哲学字彙』の著者井上哲次郎は、二版出版(1884年)と前後してヨーロッパに留学しており(森鷗外と同時期)その経験が、帰国後に編纂された『哲学字彙』三版(1912年)に何らかの影響を与えたのではないかとされているが、詳しい調査はなされていない。

本研究では、井上哲次郎の留学中の日記2冊、留学中の自筆ノート2冊、留学後の日記

87冊から、『哲学字彙』編纂に関係があると推測される、書名・西欧人学者氏名・学術用語等の抽出とそれらの分析を行い、『哲学字彙』の編纂過程を考察する。

(2) 『哲学字彙』等から抽出したデータを用いての、日本語の計量的な分析手法の開発

『哲学字彙』から抽出した訳語を、明治から現代にかけての資料を元に作成された他のコーパスと照合し、相違点を分析することにより、現代日本語への定着の様相を知ることができる。また同じく明治から現代にかけての辞書の見出し語との照合により、これらの学術用語が時を追ってどのように定着していったかの過程も知ることができる。

資料と一致した学術用語を分類するだけでなく、カイ自乗検定を用いて相互の資料における結果の関連性を検定したり、時系列の言語変化データととらえ回帰分析を行ったりするなどの計量的分析を行う、さらには分析手法自体を再検討して精度を高めることで、言語史と計量国語学の両分野に貢献できる。

(3) 当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点

代表者(真田)のこれまでの研究では、『哲学字彙』初版・二版は明治初期の出版であって、西欧の抽象語彙の訳語が固定的な形に決まる前の単語集であったことから、現代の語彙として定着するまでに日本語の中で様々な取捨選択がなされてきた。これまでの辞書の見出し語などの調査から、語彙の定着が特に進行するのは明治後期から大正初期であると考えられ、本研究で対象としている雑誌『太陽』(1895~1928年)や『英独仏和哲学字彙』(1912年)が出版された時期と一致する。この時期はまさに「現代語への定着の入り口」とも言える重要な時期と考えられるため、本研究は日本語の語彙史の研究に貢献できると思われる。また現代の資料を「書きことばコーパス」等で補足調査することにより、これまで学術用語が支えてきた現代の日本語の基本的語彙群の変化をより詳細にとらえることができる。

日本語学の分野では、語誌の研究の上に立脚し、巨視的な視点から「語彙の変化」「語彙の史的変遷」を論じている先行研究は非常に少ない。日本語の言語変化を言語学の学説を用いて論じた研究でも、音韻変化・意味変化・文法的变化に分野が限られる傾向にある。これは、用例収集の労力が特定の語誌に比べ格段に大きいことや、音韻・文法と違って語彙の調査範囲が漠然としがちで全体をくまなく網羅しにくい研究対象であることなど

によるかと思われる。本研究は、個別の用例に注意を払いながらも同時に、語彙の変遷を巨視的に見るために計量的な分析手法を取り入れており、研究方法においても独自性の高い研究である。

3. 研究の方法

(1) 『哲学字彙』の資料的研究

本研究では、井上哲次郎の留学中の日記 2 冊、留学中の自筆ノート 2 冊、留学後の日記 87 冊を中心に調査し、『哲学字彙』の編纂過程を考察した。

留学中の日記 2 冊と自筆ノート 2 冊には、当時のドイツ・フランスの大学で教えていた教授の氏名や、教授との議論の際に書き留めたとと思われる学術用語の原語とその訳語、当時井上哲次郎が読んでいたと思われる著名な哲学書の一節の筆写などが散見できるが、これまで詳細は明らかではなかった。本研究では約 900 件に及ぶ西欧人学者の氏名や書名を日記から抽出し、その表記や分野の偏りから井上哲次郎の思想形成の一端を分析した。

留学後の日記 87 冊には、井上の著作の出版部数や出版社との校正のやりとりの記録など、編集作業の様子が記録されている。

本研究では特に『英独仏和哲学字彙』の編纂と、その下地になったと推測される「哲学会」での活動を中心に調査を行い、これによって井上哲次郎が「哲学字彙の会」と称する術語検討の場をたびたび持っていたこと、「哲学字彙」稿本が『哲学雑誌』に掲載されていたことが明らかになった。

(2) 『哲学字彙』等から抽出したデータを用

いての、日本語の計量的な分析手法の開発

『哲学字彙』から抽出した訳語を、国立国語研究所が作成している「書きことばコーパス」と照合することで、術語の現代日本語への浸透度を見ることができた。

また『哲学字彙』から抽出した訳語を、明治から現代までの外国語辞書の見出し語と照合した時系列データの分析を元に、語彙の伝播を S 字型カーブに近似させる多変量ロジスティック回帰分析の言語データへの応用を試みた。この手法は国立国語研究所の「岡崎調査」と呼ばれるフィールド調査のデータ分析に活用され、方言調査におけるインフォーマントの生年の変数と調査年の変数の影響を分離することに成功した。

4. 研究成果

(1) 『哲学字彙』の資料的研究—『哲学字彙』

稿本の発見・『英独仏和哲学字彙』編者の自筆書き入れ本の発見・『改定増補哲学字

彙』の明治 24 年版の発見

井上哲次郎は『哲学字彙』の再版と三版の間で 6 年半にわたり欧州に留学し、そこでの学生生活について日記を残している。研究代表者（真田）は井上と同時期に欧州に留学していた日本人の日記との照合作業を行うとともに、この日記に書かれた欧州の学者や書名の整理を行い、井上の外国語学習の状況や言語観、人物交流について調査を行った。また井上哲次郎の留学中の自筆ノート 2 冊（東京大学所蔵）及び留学後の日記 87 冊（東京大学・文京区所蔵）についても書誌的調査を行った。

これらの調査は概要調査だけで 2 年以上に及び、詳細の調査は現在も進行中であるが、その内容の分析からさらに、井上と関連があるとみられた『哲学雑誌』の戦前の号 700 冊を 6 つの図書館で調査した。その結果、『哲学雑誌』に改定増補版『哲学字彙』（明治 17 年）に加筆した「稿本」が掲載され、それが英独仏和版『哲学字彙』（明治 45 年）の下地となったことがわかった。

また東京大学総合図書館所蔵の『哲学字彙』のうちの 1 冊が、その見返しの書き入れの様子から、英独仏和版『哲学字彙』の著者の一人である元良勇次郎が編集の際に用いたと思われる自筆書き入れ本であることがわかった。

先行研究で改定増補版『哲学字彙』（明治 17 年）には複数の版種があることが指摘されていたが、『哲学雑誌』の広告を調査したところ、明治 24 年版が存在する可能性が高いこともわかった。

今後、これらの新資料に書き込まれた見出し語や訳語を、三つの版の『哲学字彙』と照合することにより、辞書の成立過程や訳語の伝播の様相が解明されるものと期待できる。

(2) 『哲学字彙』等から抽出したデータを用

いての、日本語の計量的な分析手法の開発—一語彙の伝播の S 字カーブに関する分析手法の開発

学術用語が時間とともに伝播していく様相を S 字カーブに近似させて分析するため、医学等ですでに実績のある多変量ロジスティック回帰分析を時系列の語彙データに適用する手法を研究分担者（横山）とともに開発した。時系列データとしてすでに公開されている国立国語研究所の各種の方言データを用いてその精度の検証を行った。

この手法は過去のデータを曲線の方程式に近似させて説明するだけでなく今後の動向について予測を行うところに特徴があり、医学においては過去の患者のデータから新たな患者の予後を予測することで精度を高めてきた手法である。これを言語学の分析に

応用することで、これから近い将来に大きな変化が見込まれる言語事象や特に集中的に調査すべき地点を精度良く予測することを今後の課題と考えている。

また『哲学字彙』に収録された学術用語がどのように現代日本語に残存しているかを、国立国語研究所の「書き言葉コーパス」等と照合して分析した。その結果、一部の語彙は話し言葉に近い口語文体の書き言葉にもよく出現し、非常によく定着している様相が確認された。

このほか漢語の現代日本語への定着に関する諸問題や、異なり語数と延べ語数の関係を示すL字型分布を、h指標を使って分析する手法についても検討を行い、論文を発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ① 真田治子、h 指標を用いた語彙の計量的分析、経済学季報 (立正大学経済学会)、査読無、60 卷 3/4 号、2011、95-110
- ② 真田治子、現代日本語に浸透した学術用語、日本語学、査読無、29 卷 15 号、2010、26-34
- ③ 横山詔一、真田治子、言語の生涯習得モデルによる共通語化予測、日本語の研究 (日本語学会)、査読有、6 卷 2 号、2010、31-44
- ④ 真田治子、平成 20 (2008) 年国語国文学界の動向・国語学・近代日本の言語生活解明に向けて、文学・語学 (全国大学国語国文学会)、査読無、197 卷、2010、54-57
- ⑤ 真田治子、2008 年・2009 年における日本語学界の展望・数理的研究、日本語の研究 (日本語学会)、査読無、6 卷 3 号、2010、114-119、
- ⑥ Haruko Sanada、Gabriel Altmann、Diversification of postpositions in Japanese、Glottometrics、査読有、Vol. 19、2009、pp. 70-79
- ⑦ 真田治子、明治 24 年版『改正増補哲学字彙』の可能性、埼玉学園大学紀要人間学部篇、査読無、9 卷、2009、1-13
(http://www.media.saigaku.ac.jp/bulletin/pdf/vol9/human/01_sanada.pdf)
- ⑧ 真田治子、言語変化の S 字カーブ—解析手法の比較とその適用事例、埼玉学園大学紀要人間学部篇、査読無、8 卷、2008、1-11
(http://www.media.saigaku.ac.jp/bulletin/pdf/vol8/human/01_sanada.pdf)
- ⑨ 横山詔一、朝日祥之、真田治子、敬語意識の変化を予測する記憶モデル—多変量 S 字

カーブによる解析—、社会言語科学、査読有、11 卷 1 号、2008、64-75

- ⑩ Shoichi Yokoyama、Haruko Sanada、S Curve Analysis with Multiple Logistic Regression for Language Change、Glottology、査読有、Vol. 1、2008、pp. 120-123
- ⑪ 横山詔一、真田治子、多変量 S 字カーブによる言語変化の解析—仮想方言データのシミュレーション—、計量国語学、査読有、26 卷、2007、79-93
- ⑫ 真田治子、井上哲次郎の欧州留学と『哲学字彙』第三版の多言語表記、埼玉学園大学紀要人間学部篇、査読無、7 卷、2007、1-14
(http://www.media.saigaku.ac.jp/bulletin/pdf/vol7/human/01_sanada.pdf)

[学会発表] (計 13 件)

- ① 真田治子、「日本語の中に潜む無意識の規則性を探る—表記と音韻に関する計量的・実験的研究」、東北大学大学院国際文化研究科附属言語脳認知総合科学研究センター「言語・脳・認知」公開講座 (招待講演)、2010 年 7 月 1 日、東北大学
- ② 真田治子、「哲学字彙」稿本と『英独仏和哲学字彙』の成立、日本語学会 2010 年度春季大会、2010 年 5 月 30 日、日本女子大学
- ③ 横山詔一、朝日祥之、真田治子、第 9 回徳川宗賢賞受賞論文 (2009 年度) 優秀賞受賞記念講演「記憶モデルによる敬語意識の変化予測」、第 25 回社会言語科学学会研究大会、2010 年 3 月 13 日、慶應義塾大学
- ④ 真田治子、『哲学字彙』稿本の復元と明治 24 年版『改正増補哲学字彙』の可能性、第 266 回近代語研究会、2009 年 9 月 26 日、二松学舎大学
- ⑤ Haruko Sanada、Distribution of syllables in Japanese texts、Qualico 2009 (International Conference on Quantitative Linguistics)、2009 年 9 月 19 日、Graz University (オーストリア・グラーツ市)
- ⑥ 真田治子、言語変化の S 字カーブの計量的研究—解析手法と分析事例の比較、日本語学会第 137 回大会、2008 年 11 月 30 日、金沢大学
- ⑦ Shoichi Yokoyama、Yoshiyuki Asahi、Haruko Sanada、A Multiple Logistic Curve Model for a Change in Language at OKAZAKI-City、18th International Congress of Linguists (第 18 回世界言語学会会議)、2008 年 7 月 25 日、Korea University (韓国・ソウル)
- ⑧ 横山詔一、真田治子、言語変化の S 字カーブによる鶴岡市の共通語化予測、韓国国立

国語院招待講演、2008年7月22日、韓国国立国語院

- ⑨横山詔一、真田治子、言語変化のS字カーブによる鶴岡市の共通語化予測、日本語学会2008年度春季大会、2008年5月18日、日本大学文理学部
- ⑩横山詔一、朝日祥之、真田治子、岡崎市における敬語意識の変化を予測する、第21回社会言語科学会研究大会、2008年3月22日、東京女子大学
- ⑪Haruko Sanada, Gabriel Altmann, On Two Simplifications of the Japanese Writing System, 5th Trier Symposium on Quantitative Linguistics, 2007年12月7日、Trier大学(ドイツ・Trier市)
- ⑫真田治子、井上哲次郎の欧州留学と日記中の人物・書名について、中日理論言語学研究会・北京大学外国語学院日本語日本文化学科主催・2007中日理論言語学研究国際フォーラム、2007年9月2日、北京大学(中国・北京市)
- ⑬真田治子、井上哲次郎の欧州留学—『哲学字彙』第三版との関わりから—、関西大学アジア文化交流研究センター第7回研究集会・漢字文化圏近代語研究会第6回国際シンポジウム「漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成・創出と共有」、2007年7月29日、関西大学

[図書] (計8件)

- ①Haruko Sanada, Praesens Verlag (Wien), Text and Language: Structures - Functions - Interrelations - Quantitative Perspectives, 2010, pp. 183 - 194
- ② Shoichi Yokoyama & Haruko Sanada, RAM-Verlag, Studies in Quantitative Linguistics, Vol. 5, 2009, pp. 176-192
- ③真田治子、朝倉書房、計量国語学事典、2009, pp. 61-65, pp. 105-109, pp. 115-118
- ④真田治子、ひつじ書房、日本近代語研究 5巻、2009, pp. 229-244
- ⑤Haruko Sanada & Gabriel Altmann, Books - XXI (Chernivcy, Ukraine), Problems of General, Germanic and Slavic Linguistics, 2008, pp. 493-502
- ⑥真田治子、関西大学出版部、漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成—創出と共有、2008, pp. 353-372
- ⑦Haruko Sanada, Peust & Gutschmidt Verlag (Göttingen, Germany), Investigations in Japanese Historical Lexicology: Revised Edition, 2008, p. 228
- ⑧Haruko Sanada, Ruta (Ukraine, Chernivcy), Typological and quantitative problems of lexicology, 2007, pp. 61-82

[その他]

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

真田 治子 (SANADA HARUKO)
立正大学・経済学部・教授
研究者番号：90406611

(2) 研究分担者 (平成19年度)

横山 詔一 (YOKOYAMA SHOICHI)
独立行政法人国立国語研究所・研究開発部門・グループ長
研究者番号：60182713

(3) 連携研究者 (平成20年度)

横山 詔一 (YOKOYAMA SHOICHI)
独立行政法人国立国語研究所・研究開発部門・グループ長
研究者番号：60182713